

『資本論』第一卷第一章「商品」

第一節「商品の二つの要因—使用価値と価値（価値の実体、価値の大きさ）」

平成二八年四月一五日
塩見由梨

■社会の富

資本主義的生産様式が支配的に行われている社会の富は、一つの巨大な商品の集まりとしてあらわれる。

- ・個々の商品は、社会の富の基本形態としてあらわれる。

■商品の有用性—使用価値

商品は第一に、人間のなんらかの欲望を満足させる外的対象である。

- 各々の有用物は、質と量の二重の観点から考察される。

- ・さまざまな使用方法および量の社会的尺度の発見は、歴史的な行為である。

- ある物の有用性は、それを使用価値にする。

- ・有用性は商品体の属性に規定されるため使用価値は商品体なくしてありえず、また1ダース、1エレといった量的規定性も前提となる。
- ・使用価値は富の素材的内容をなし、同時に資本主義的生産様式が支配的な社会のもとでは、それは交換価値の素材的な担い手となる。

価値 = 元換. ニシテ. 有用性 = 使
 価値 = 量に對しての
 価値実体 = (同) 使
 といふ規定もあら.

■商品の交換関係—交換価値

交換価値は、ある使用価値が他の使用価値と交換される量的関係としてあらわれる。

- ・この関係は絶えず変動するため、商品に固有で内在的な交換価値というものは一つの形容矛盾であるようにみえる。

- ある一つの商品は、さまざまな異なる割合の諸商品と交換されるため、それだけさまざまな交換価値もっている。

- ・1クォーターの小麦に対して、それぞれの量の靴墨、絹、金…は互いに置き換える、等しい大きさの諸交換価値である。

→第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの等しいものをあらわしている。

→第二に、交換価値は、それと区別されるある実質の表現様式でしかありえない。

- 小麦と鉄の二つの商品をみると、交換関係はつねに与えられた量の小麦がいくらかの量の鉄に等置されるという等式であらわされる。

- ・この等式は、二つの違った物がある一つの「第三のもの」に等しいことを意味する。

- 諸商品の諸交換価値はある共通なものに還元され、その共通物の多少をあらわすことになる。

■交換関係の「第三のもの」—価値

諸商品の交換関係を明白に特徴づけるのは、諸商品の使用価値の捨象である。

- ・交換関係における使用価値は適当な割合でそこにありさえすれば、他のどの使用価値ともまったく同じだけのものとして通用する。

- 商品体から使用価値を捨象すると、労働生産物という属性だけが残る。

- ・労働生産物の使用価値を捨象すると、個々の具体的な労働もすべて同じ抽象的人間労働に還元される。

- 労働生産物に残るのは、無差別な人間の労働力の支出の凝固物だけである。

- ・これらの物に共通な社会的実体の結晶として、これらのものは価値—商品価値である。

- 商品の交換関係からあらわれる共通物は、商品の価値である。

■価値の量

価値の大きさは、そこに含まれる労働の量によって決まり、時間を度量標準として計られる。

x

価値 = 元換 9 粒 一つ
 9 粒 7°.
 { 実体 = 使
 { 価値 = 量

□諸価値の実体をなす労働は「同じ人間労働力の支出」である。

- ・無数の個別的労働力は、交換関係においては一つの同じ人間労働力とみなされる。
- ・個人的労働力は、一商品の生産に平均的に必要な労働時間だけを必要とする限り、他の労働力と同じ人間の労働力である。

「社会的」の
どうやって
規定するの?

・社会的に必要な労働時間とは、社会的に正常な生産条件と労働の熟練および強度の社会的平均度である使用価値を生産するために必要な労働時間で決まる。

□ある使用価値の価値量を規定するのは、その生産に社会的に必要な労働時間だけである。

- ・個々の商品は、それが属する種類の平均見本とみなされ、等しい大きさの労働力、あるいは同じ労働時間で生産される諸商品は同じ価値量をもっている。

■価値の変動

生産に必要な労働時間は、労働の生産力に変動があればその度変動する。

- ・労働の生産力は、特に「労働者の技能の平均度、科学とその技術的应用可能性との発展段階、生産過程の社会的結合、生産手段の規模および作用能力によって、さらにまた自然事情によって」規定される。
- ・労働の生産力が大きいほど、その物品に結晶する労働量はそれだけ小さく、したがってその価値もそれだけ小さくなる。
- ・一商品の価値の大きさは、その商品に実現される労働の量に正比例し、その労働の生産力に反比例して変動する。

■使用価値と価値は不可分ではない

その効用が労働に媒介されない空気や草原のようなものは、価値ではないが使用価値でありうる。

- ・商品を生産するには、他人のための使用価値、社会的使用価値を生産しなければならない。
- ・どんな物も、使用対象であることなしに価値ではありえない。

疑問点

・「社会の富」について。どの社会形態においても使用価値は富の素材的内容をなす(50)が、資本主義的生産様式が支配的な社会の富の基本形態は「商品」とされる(49)。商品が使用価値と価値という二要因からなるということは、資本主義社会の富もまた使用価値と価値の二要因からなると考えてよいか。また、商品を目安に資本主義社会の豊かさを考えるとき、使用価値が豊富になるということと価値が豊富になる(価値増殖?)ということは同じことか。

・S.51の「ある特定の商品…」ではじまるパラグラフについて。「……どれも1クォーターの小麦の交換価値であるから、x量の靴墨、y量の絹、z量の金などは、互いに置き換えうる、または互いに等しい大きさの、諸交換価値でなければならない」という文の「互いに置き換えうる」というのは、小麦に対して置き換えうるという意味か。それともこの関係から小麦を排してx量の靴墨とy量の絹だけでも交換が成り立つという意味か。

・社会的労働時間が規制するのは「価値」と「交換価値」のどちらか。生産に労働を投じる前から商品の価値は社会的労働時間で決まっているのか、それとも交換関係に持ちこまれるとき実際の労働時間ではなく社会的労働時間だとみなされるのか。あるいは、これもどちらで考えても結局同じことか。